

## 論 説

### 金 融 的 従 属 論

—— ヴェ. イ. レーニンの概念の検討 ——

紀 国 正 典

#### はじめに

「資本主義は、ひとにぎりの『先進』諸国による地上人口の圧倒的多数の植民地的抑圧と金融的絞殺との世界的体系に成長した」<sup>1)</sup> ——これはレーニンが当時の資本主義の特徴について明快に総括した文章である。当時は帝国主義諸列強（レーニンは「金融的強盗のグループ」と呼ぶ）が、世界中の住民を戦争にまきこもうとして、大規模な勢力争いをくり広げていた時であった。

それから約70年が経過した現在、「金融の自由化、国際化」のかけ声のもとに、国際的な規模の金融の再編成と金融の勢力範囲を奪いあう闘争が、すさまじい勢いで始まっている。「金融的絞殺の世界的体系」が、新しい装いで、新しい条件下で躍動しているようである。これらの現代の諸問題の研究は緊急の課題となっている<sup>2)</sup>。

1) ヴェ. イ. レーニン『資本主義の最高の段階としての帝国主義』大月文庫版、P. 13（以下『帝国主義』と略す）。

2) これらの諸問題についての最近の注目すべき著作として、関下、鶴田、奥田、向編『多国籍銀行』有斐閣、1984年、布目真生『インターナショナルバンキング』有斐閣、1985年、関下、奥田編『多国籍銀行とドル体制』有斐閣、1985年、松村文武『現代アメリカ国際収支の研究』東洋経済、1985年、等がある。

本稿はこれらの諸成果から大いに啓発を受けて取り組まれたものである。現代の諸問題についても、手元に充分でない資料不足を克服しつつ、今後研究をすすめたい。

本稿は、これらの研究の意義と重要性を感じつつもこの課題を後にまわし、その予備作業としてレーニンの時代の金融的な支配と従属の世界体系についての理論的な検討を目的とするものである。しかもその方法は、レーニンが「帝国主義世界戦争の前夜の資本主義世界経済の概観と国際的相互関係」<sup>3)</sup>を明らかにしようとした「帝国主義に関する資料」を「金融的従属論」という視点から再整理、再構成してレーニンに語ってもらうという手法を用いている。この方法が最適であるとは思われないが、少なくともレーニンの思想をまとめて提供して、今後の考察に役だてる目的だけは達成するであろう。

## 第1章 金融の集中と支配・従属

レーニンの金融的従属論を考えるのに参考になるのは、彼が金融の集中問題を扱うときどれだけの住民（人口）が金融独占の影響下に置かれているかの正確な計算を試みていたことである<sup>4)</sup>。これをふまえるならば、金融的従属とは、金融の集中・集積がすすむにつれて、ますます多くの住民が、ますます深く、単一の中心地の地位をさらに強めつつある金融独占体の支配と影響のもとに把握されることであると定義できよう。つまり、金融の集中と支配の組織体系がすすめばそれだけ、一方の極では単一の中心地に巨額の貨幣資本が集中し、金融業が独占的に管理され、それを利用して土地投機、有価証券投機、買収、金権政治などの金融独占利潤獲得の機会が増大するが、他方の極では、多くの住民にとって自分達の貨幣資本や貨幣収入が自分達の生産と生活の安定と向上のために使用されないでまったく逆の作用をもたらすという結果が発生すること、これが金融的従属の経済法則である。レーニンは、ランスブルグからの抜き書きに重要マークをつけて次のように引用している。「ドイツの貯蓄銀行における預金＝約16½（十億）マルク、このことは、資本の潜在的状態から可視的状态への転移、大資本への援助、地代（大部分は抵当権）への転化。預

---

3) レーニン『帝国主義』P.11。

4) レーニンが『帝国主義』を著すために準備した膨大なノートでは、彼はたとえば銀行営業部あたり住民数などの計算を試みている。

金者は、預金を自分自身で管理することをあきらめることで、＜大資本の力を強め、小営業の抵抗力を弱めている＞」<sup>5)</sup>。

レーニンが理解していた金融の集中・集積の経済的指標をまとめると第1に、小数の大銀行の営業網（各種の業務を包括する）や支店網がその国のすみずみまで配置され、金融業務が独占されることである。彼は、営業所や、出張所、支店等がどれだけ増大して各地域に配置されているか、その特徴はどういうものであるかを各国について調査し、この「目の細かい銀行網」がどのように組織されているかに絶えず注意を払っている。彼は書いている。「われわれは、全国をおおい、すべての資本と貨幣所得を集中し、幾千幾万の分散経営を単一の全国民的な資本主義経済に、ついで全世界的な資本主義経済に転化させる、細かな運河の網の目がどんなに急速に成長しつつあるかを見る。……より古い資本主義諸国では、この『銀行網』はもっと目が細かい」<sup>6)</sup>。

第2は、この細かい銀行網が、「より多くの地方、より多くの僻地、より広い住民層」をつかまえることによって、住民の貨幣資本と貨幣収入のほとんどが預金に転化して銀行の資本（他人資本）を増大させ、その多くが少数の大銀行の支配するところとなることである。

第3は、以上の金融力を背景に、大銀行が小銀行の株式を所有することによって経営に参与し（参与制度）、この銀行を事実上の大銀行の支店にしてしまうことである。この参与制度によって、大銀行が小額の資本参加で系列支配下にあるはるかに巨大な銀行資本を支配できる。レーニンはシュルツェーゲーヴァニッツを引用して書いている「1909年末には、ベルリンの9大銀行は、その系列下にある諸銀行とあわせて、113億マルクを、すなわち、ドイツの銀行資本総額のほぼ83%を支配していた。『ドイッチェ・バンク』(Deutsh Bank)は、その系列下にある諸銀行とあわせて、約30億マルクを支配しており、プロイセン国有鉄道金庫とならんで、旧世界における最大の、しかも高度に地分

---

5) レーニン『帝国主義論ノート』レーニン全集第39巻、P.146、（以下『ノート』と略す）A. ランスブルグ『貨幣トラスト』からの抜き書き。

6) レーニン『帝国主義』P.49。

散的なし資本の集合体である」<sup>7)</sup>。

第4は、銀行が有価証券発行業務までも独占してしまうことである。レーニンは、次のように引用する。『どの銀行もみな取引所だ』——この現代の格言は、銀行が大きくなればなるほど、また銀行業における集積が進展すればするほど、ますます真実をふくんでくる」<sup>8)</sup>。

第5は、小数の大銀行相互の間で独占的協定（競争を制限しようという協定）が結ばれ、銀行トラストが形成されることである。もちろんこの協定は、大銀行相互のヘゲモニー争いを消滅させるものではなく、激しい金融独占間競争の力関係に対応して並行的に発生する。

住民の大多数への支配力によって巨額の貨幣資本と金融業務を集中した金融独占は、多くの生産分野や多くの地域で金融支配の網の目を張りめぐらし、巨大産業との支配・結合関係を深め、このようにして資本の集積と独占体の形成の過程を何倍にも強め、促進するのである。産業企業との多面的な結合は、金融独占体の総合的金融力を高めることになる。レーニンは次のようにヤイデルスから重要マークをつけて書き出している。「大銀行は、産業企業との結びつきを場所と業種の点でできるだけ多面的につくりあげて、個々の金融機関の歴史から説明のつく場所的、業種的な分布の不平等をますます除去することにつとめている」<sup>9)</sup>。

金融独占と産業独占の結合体である金融資本は、金融支配力と産業支配力をむすびつけて万能の支配体系を形成する。この支配体系から金融的支配と従属の関係をとり出すと次のように整理できる。

第1は、住民の多くから集められた巨額の貨幣資本が産業独占の私的利益のために優先的に有利な条件で用いられ、結局、この資金が産業合理化や不均等発展、無計画的な産業発展等の経済危機を促進するということである。レーニ

---

7) レーニン『帝国主義』P.41。

8) レーニン『帝国主義』P.51。

9) レーニン『ノート』P.132。ヤイデルス『ドイツの大銀行の工業にたいする関係』からの抜き書き。

ンはこの資金の配分が巨大独占の私的利益のためであることをはっきりさせた上で、次のように言う。「巨大資本の——それはなによりも最大級の、独占的資本の——利益に合致するものであって、この資本は、住民大衆が食うや食わずで暮らしており、また農業が工業の発展から絶望的に立ちおくれしており、さらに工業では『重工業』が他のすべての工業部門から貢物を取りたてているというような条件のもとで、行動しているのである」<sup>10)</sup>。

第2は、有価証券発行業務や金融業務の独占の頂点では、不正な業務や投機的な方法で巨額の金融独占利潤を稼ぎ出す技術、金融的術策の技術が蓄積されることである。

この技術としてレーニンが詳しく例証しているのは、会社の合併、設立等の機会を利用した株価操作によって証券価格騰貴の利潤を手にいれるという投機的手法と交通独占と土地投機についてである。しかも、これらの利潤は、子会社の設立、経営の分割、あるいは虚偽の貸借対照表を作るなどの操作で、その表面からは何も見えなくして、一般の大衆や株主の目から隠蔽される。

第3は、巨大な規模の金融独占は商工業業務全般を金融的に従属させることを可能にすることである。レーニンは次のように、その金融的従属の過程をまとめている。「彼らは——銀行取引関係を通じ、当座勘定その他の金融業務を通じて——、はじめは個々の資本家の事業の状態を正確に知ることができるようになり、のちには彼らを統制し、信用を上げたり狭めたり、信用を緩和したり引き締めたりすることによって彼らに影響をおよぼすことができるようになり、そして、最後には、彼らの運命を完全に決定し、彼らの収益性を決定し、彼らから資本を引きあげたり、彼らの資本を急速かつ大規模に増加させる可能性をあたえたり、等々のことをすることができるようになる」<sup>11)</sup>。

第4は、金融独占が金権政治・買収政治と官僚主義の温床になることである。レーニンは金融独占を総括して次のように言う。「現代ブルジョア社会の例外なくすべての経済機関と政治機関のうえに、従属関係の細かな網の目を張

10) レーニン『帝国主義』P. 49。

11) レーニン『帝国主義』P. 46。

りめぐらしている金融寡頭性——これがこの独占の最もきわだった現れである」<sup>12)</sup>。

金融的従属論がその対象とするのは、以上のように金融独占とそれが支配するその国の住民との関係ばかりではない。巨大銀行業者が、他の国の住民全般を金融的に支配する関係、つまり金融的従属の世界体系をもふくむものである。この世界体系では、巨大な国際的銀行業者が金融的勢力範囲とヘゲモニーを広げるために、独占間協定を複雑にからませながら国内外で死にものぐるいの闘争を繰り広げている関係、それが住民にもたらす諸問題、および国際的な巨大銀行のもとに従属しつつ自国で支配を維持する金融独占、この二重の金融的従属関係のもとにある住民の諸問題、これらも対象にふくまれるのであって、レーニンの分析も当然にこの領域をその対象にしている。

## 第2章 金融的支配と従属の世界的体系

金融的従属を世界的体系としてみれば、それはレーニンが繰り返し述べているように、「金融上の『力』をもつ小数の国家が他のすべての国家からぬきんでいること」、そしてこの金融上の『力』を手段にしてひと握りの富裕で強力な国家あるいは「国際的銀行業者」である国々が全世界を金融的に略奪していることである<sup>13)</sup>。

小数の富裕な国家の「金融上の力」とは、第1に富裕な国に貨幣資本が大量に蓄積されていること、第2に国際的な金融の支配の網の目が組織されていること、第3に国際的な金融業務から法外な金融利潤を稼ぎ出す技術、「金融的術策」の高度な技術が蓄積されていること、第4に貿易独占、植民地独占や一般産業上の国際トラストあるいは軍事上の力によって補完される金融支配力をもっていることである。

先進諸国に大量の貨幣資本が蓄積されているのは、農業が工業からおそろし

---

12) レーニン『帝国主義』P.160。

13) レーニン『帝国主義』P.77。

く遅れて発展するなどの発展の不均等性と大衆のなかば飢餓的な生活水準のもとで必然的に巨額の「過剰資本」が生み出されるからであり、さらに小数の巨大銀行が貨幣資本と貨幣収入のすべてをかき集め、その処理権を集中した「信用創造能力」をもっているからである。これらの貨幣資本は世界中に輸出され、輸出先の地域の政治・経済に深い金融的影響力をもつにいたる。

有価証券の発行が金融的支配の強力な手段となることにレーニンがとりわけ注目していることは各種の文献から明白である。彼は、全世界の有価証券総額を正確に計算し、4つの最も富んだ資本主義国（イギリス、フランス、アメリカ合衆国、ドイツ）がその圧倒的多数を所有していることを示した後で、「これらの4ヶ国であわせて4,790億フランを、すなわち全世界の金融資本のほとんど80%をもっている。残りの世界のほとんどすべては、なんらかの形でこれらの国々の——国際的銀行家の、世界金融資本のこれら4本の柱の——債務者および貢納者の役割を演じている」<sup>14)</sup>と述べている。「金融資本」の概念は、「生産の集積、それから成長してくる独占体、銀行と産業との融合あるいは癒着」と定義づけられている。しかし、他方では彼は、貨幣資本が社債、外債、株式などの証券資本の形態をとり、世界各地の政府や産業などに投資されている場合の、この証券資本にも「金融資本」をあてはめているのである。「帝国主義論ノート」にもそれが多く見られる。例えば彼はシュルツェーゲーヴァニッツの次の文章を抜き出して、この文章に＜金融資本＞という注意書きを付している。「以前のマンチェスターの取引所とおなじように、今日では、ロンドンの株式取引所はイギリス国民経済の核心になっている。だが、さまざまな姿態をもつ取引所の世界では、一般に認められているように、今日、外国の有価証券が指導権をもっている。すなわち、植民地、インド、エジプト等の国債と地方自治体債、南アメリカ公債、とくにアルゼンティン公債と日本公債、アメリカおよびカナダの鉄道や銅鉱山の株式、なによりも南アフリカおよび西オーストラリアの金鉱株、アフリカのダイヤモンド株、ローデシアの有価証券、等が

---

14) レーニン『帝国主義』P.79。

それである」<sup>15)</sup>。さらに「ノート」の「1912年—1916年の雑録」のなかにある「帝国主義とそれにたいする態度」という表題のメモは次のようになっている<sup>16)</sup>。

帝国主義とそれにたいする態度

1. 定義  $\left\{ \begin{array}{l} \text{経済的} \\ \text{政治的} \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} \text{反動} \\ \text{民族的抑圧} \\ \text{併合} \end{array} \right.$

帝国主義＝資本主義

- a 独占的  $\left\{ \begin{array}{l} 1) \text{ カルテル} \\ 2) \text{ 大銀行} \\ 3) \text{ 金融寡頭支配 (1,000 億以上の証券資本)} \\ 4) \text{ 植民地と資本転出 (世界の分割)} \end{array} \right.$
- b 寄生的  $\left\{ \begin{array}{l} 1) \text{ 資本輸出} \\ 2) \text{ 1,000億の証券資本} \end{array} \right.$

人口数でみればきわめて小数の国に蓄積された大量の貨幣資本が1,000億以上の証券資本に転化して、金融寡頭支配の最も強力な要素となること、レーニンがこの事実に着目していたことは明瞭である。

先進諸国の金融市場に大量の貨幣資本が集積されるのは、国内からかき集められるばかりではなく、次にみるように、国際的な金融の網の目によって世界の隅々からすくいあげられることもできる。

金融上の「力」の第2は、世界のすべての国に張りめぐらされている金融の網の目とそのさい最も大きな役割を演じる植民地に設置される銀行、および在外銀行、そしてそれらの支店である。レーニンは次のように、国際的銀行業者である国々の「力関係」を表現する。

「ドイツの帝国主義者たちは、この点でとくに『うまく』やっている『古い』植民地領有国を、うらやましげにながめている。イギリスは1904年に2,279の

15) レーニン『ノート』P.418。

16) レーニン『ノート』P.729。

支店をもつ50の植民地銀行（1910年には5,449の支店をもつ72の銀行）をもっていたし、フランスは136の支店をもつ20の銀行を、オランダは68の支店をもつ16の銀行をもっていたのに、ドイツは『全部でたった』70の支店をもつ13の銀行しかもっていなかった。アメリカの資本家たちは、それはそれで、イギリスとドイツの資本家をうらやんでいる」<sup>17)</sup>。なお、レーニンは、1904年のイギリスの植民地銀行を50と計算しているが、レーニンが依拠したリーサーの計算ではこの50のなかに植民地銀行以外のイギリス外国銀行もふくまれている<sup>18)</sup>。

ドイツがどのようにイギリスをうらやんでいるかは、シュルツェーゲーヴァニッツに聞いてみよう。彼は次のように言う。「ドイツの外国銀行は、古くから定着しているイギリスの〈外国銀行〉の競争に、いたるところでぶつかった。後者は、今日でもまだ、その営業範囲と株式資本とではるかにドイツ銀行を凌駕しているのである……イギリスの世界帝国には、ドイツの銀行支店はほとんど一つもなく、しかも、イギリス人は万人のために世界を管理しているの

17) レーニン『帝国主義』P. 86。

18) レーニンが依拠したリーサー著『ドイツの大銀行とその集中』からの彼の抜き書きは次のようになっている。「90年代末には、ドイツの海外銀行は4銀行存在するにすぎなかったが、1903年には、32支店をもつ6銀行となり、1906年のはじめにはすでに優に1マルクをもつ1銀行が、ほぼ70の支店を支配していた。

けれども、このことは、この分野における他の諸国家のつぎのような成功に比べると、相対的にあまりたいした意義をもっていない。——たとえば、イギリスには、すでに1904年に、ロンドンに本拠をおく32の植民地銀行（1910年：36）と、植民地に本拠をおく2104銀行（1910年：3258）と、さらに175（2091）の支店をもつその他18（1907年：30）（1910年：36）のイギリス外国銀行があった。フランスはすでに1904—1905年に、104の支店をもつ18の植民地銀行と在外銀行を所有していた。オランダは、68の支店をもつ16行の海外銀行をもっていた」『ノート』P. 326。レーニンがイギリスの在外銀行一般を植民地銀行にふくめているのは、彼の植民地領有の範囲がリーサーよりも広いからかも知れないが、「ノート」を見ても明確に裏づけるものはない。

なお、フランスとオランダの銀行と支店数がリーサーとレーニンとで食い違っているのは、この数値については別のノートにあるジョルジュ・ディウリッチの『ドイツの銀行の国外伸張とドイツの経済的發展との関係』パリ（およびベルリン）、1909年、の数値（ノートP. 108）に依拠したからである。

だ、と主張された。ドイツの外国銀行業の将来は、つぎの政治的任務に大きくかかっている、すなわち、まだ侵害されていない世界の留保、回教世界の新生、アフリカのドイツ植民帝国」<sup>19)</sup>。

植民地銀行もふくんだ在外銀行一般の規模が国内の銀行資本の規模と比較してどれだけの比率をしめるかについての詳しい資料はレーニンの『帝国主義』にはない。しかし、レーニンが、このより正確な数値を求めていたことは「ノート」に散見できる断片的な統計資料から推察することができる。

イギリスの銀行については、彼は「バンク」1912年に掲載された「イギリス株式銀行統計」の数値をまとめている<sup>20)</sup>。それをそのまま挙げてみると次のようになる。〔第1表〕

第1表を一見しても、わずか20年たらずの期間で国内の銀行数が激減し、逆に支店数が激増して金融の集中が進行していること、他方で植民地銀行は銀行数も支店数も増加して国際的な金融の網の目が広がりつつあることが読みとれる。レーニンがイギリスの植民地銀行の数を1910年で5,449の支店をもつ72の銀行と見積もっていたことからみれば、この統計数値の在外銀行一般の数値は

第1表 イギリス株式銀行数とその支店

(イングランドとウェールズ)		
1890年—104銀行(株式銀行)	その支店	2203
1911年— 44銀行(株式銀行)	その支店	5417
(スコットランド)		
1890年— 10銀行	その支店	975
1911年— 9銀行	その支店	1227
(アイルランド)		
1890年— 9銀行	その支店	456
1911年— 9銀行	その支店	739
(植民地銀行)		
1890年— 30銀行	その支店	1742
1911年— 38銀行	その支店	3645

19) レーニン『ノート』P.41。シュルツェーゲーヴァニッツ『ドイツの信用銀行』からの抜き書き。

20) レーニン『ノート』P.134。これは『バンク』1912年の株式銀行統計である。

控え目なものになるが、それでも海外の金融業務の規模が国内のそれを大きく上回っていることを示している。

フランスについては、C. ヘーゲマンの〈フランスの大銀行経営の発展〉の第Ⅱ表（これはフランスの3大銀行、クレディ・リオネ、コントアール・ナショナル、およびソシエテ・ジェネラル、の支店数である）が総括されている〔第2表〕<sup>21)</sup>。

第2表 フランスの銀行支店数

	国外支店	地 方	ハ リ	Σ
1870年	62			62
1880年	12	119	67	198
1890年	24	194	66	284
1900年	35	467	120	622
1906年	44	660	179	883
1908年	47	968	193	1208

この表からはフランスの大銀行の国外支店の規模がイギリスのように際だっていないことは明らかであるが、支店数の増加はパリよりも、国外と地方で大きいことが読みとれる。

ドイツについては、国内と海外の銀行数、金融業務の比較ができる資料は見あたらない。しかし、ドイツの海外銀行の営業規模と範囲が増大していることを知る資料は抜き書きされている。1つは、リーサーが、ドイツの大銀行によって設立された海外銀行の数を計算したものであり、レーニンが「明らかに不完全な統計」と注意書きをしているものである。これによれば、1880—89年には合計で11の海外銀行が、1890—99年には22の海外銀行が、1900—1908年には24の海外銀行が設立されている<sup>22)</sup>。もう1つは、オットーの作成した「ドイツ海外銀行（10銀行）の総機能資本」であり、レーニンが要約しているもので

21) レーニン『ノート』P.154。

22) レーニン『ノート』P.328。

ある<sup>23)</sup>。これをみてもドイツの海外銀行業務が拡大していることが明瞭である〔第3表〕。

第3表 ドイツ海外銀行（10銀行）の総機能資本

1889年	— 45,6	(百万マルク)
1890年	— 41,3	(百万マルク)
1900年	— 206,5	(百万マルク)
1905年	— 329,3	(百万マルク)
1908年	— 607,1	(百万マルク)

「金融資本の主要な業務である有価証券発行のもつ異常に高い収益性」<sup>24)</sup>をレーニンは金融寡頭性支配の指標として特徴づけている。第3の金融上の「力」とはこの金融的術策の技術である。

外国政府の公債や社債、株式などの外国証券の発行、引受けは、もはやその利子を得るためのものというより、投機的手段として利用され金融資本に法外な収入を保障するのである。「投機的な利潤」と規定してレーニンが例示しているのは、第1に公債や外債の引受手数料の利益の高さ、第2に外国の社債や株式の引受価格と発行価格の差額、証券価格のつり上げの生み出す転売の利益等である。

この「投機的な利潤」の実際は『帝国主義論』に詳しく紹介されているが、「ノート」はより詳細である。

ランズブルグが『バンク』に書いた「国家と外債」という表題の文章を、レーニンは「重要マーク」をつけて抜き出している。それは次の文章である。「ドイツ政府は外債を禁止した？なにが諸銀行をこの方向に駆りたてたのか？諸銀行がすでに＜動きがとれない＞という事情である（メキシコ、中国、トル

23) レーニン『ノート』P.106, ヴォルター・オットー『海外におけるドイツ大銀行の外債引受業務、設立業務、および参加業務』からの抜き書き。

24) レーニン『帝国主義』P.72。

コその他が、破産宣告をするおそれがある)。

これらの国家にたいする最初の外債に、諸銀行を駆りたてたのはなにか？  
利潤である！……＜国内にはこの種の事業で、外債の引受けや転売にほぼ匹敵する利益をもたらすものは一つもない＞『引受相場と応募相場の差額、7ないし8％、種々の条件、たとえば半年の利子相当額を＜保証金＞として預託、等々』<sup>25)</sup>。

金融資本は高い手数料を受けとるばかりではない、外国銀行の新株を金庫にしまうという操作まで行う。「ベルリンの『ドイチェ・バンク』は、シベリア商業銀行の株をベルリンにもってゆき、それを一年間金庫にしまいこんで置いて、そのあとで100にたいする193という、ほとんど2倍の相場で売り出し、約600万ルーブルの儲けを『稼ぎだした』のであって、この儲けはヒルファディングが『創業者利得』と名づけたものである」<sup>26)</sup>。

ヨーロッパの高利貸であるフランスのやり口も汚いものである。レーニンはフランスの金融寡頭性を暴露したりジスの研究に依拠して次のように述べている。「借款を受ける国は、総額の90％以上は受けとらないのが普通であって、10％は銀行その他の仲介者の手にはいる。銀行の利潤は、4億フランの露清公債から8％、8億フランのロシア公債（1904年）から10％、6,250万フランのモロッコ公債（1904年）から18.75％であった」<sup>27)</sup>。さらにエジプト精糖所事件にもふれている。「巨大銀行の1つ『ソシエテ・ジェネラル』が子会社の『エジプト精糖会社』の社債6,400口を発行した。発行価格は150％であった。すなわち、銀行は1ルーブルにつき50カペイカ儲けたわけである。だがこの会社の配当は架空のものであることがわかり、『公衆』は9,000万から1億フランの損失をこうむった」<sup>28)</sup>。

---

25) レーニン『ノート』P. 61。アルフレッド・ランズブルグ『国家と外債』からの抜き書き。

26) レーニン『帝国主義』P. 69。

27) レーニン『帝国主義』P. 71。

28) 前掲箇所。

金融資本のきわめて高い投機的利潤を生む、金融業務の「高度な技術」を可能にしているのは第1に、有価証券発行業務がきわめて少数の金融機関によって完全に独占され、金融の社会化が高度に組織されていること、第2に借り手である会社や銀行、政府を貸し手である自分のところにつなぎとめることのできる金融的な勢力範囲、つまりその金融資本の金融的影響力を発輝できる支配領域をもっていることである。

「高度な技術」を支えているのは、このような経済的基盤のもとで、第1に金融情報の独占が可能になり（金融新聞はほとんど買収されているとフランスのリジスと言う）、それによって儲けの機会を工夫することができ、第2に実際の営業状況や配当の状況を公衆からかくすために、そして架空の配当のでっちあげなどの高い投機的利益を隠すために、報告書や貸借対照表からは何もわからない状態にしておくことであり、これらの「高度な技術」は実際には「卑しい技術」なのである。

この適例をレーニンはリジスから抜き出している。「1906年のロシア公債。＜銀行の仲介者＞であるX氏が、1,200万を受け取っている。報告書と貸借対照表からはなにも理解できない。……銀行の収益はどこから生じるか？ 有価証券の発行から。このことが隠蔽されている。＜その実例＞クレディ・リオネは、趣意書もなく、広告もださずに、こっそりと『窓口職員』や『勧誘員』に、目立たないように隠れて仕事をさせて、8億7,400万フラン（額面価格）でロシアの『土地低当貴族銀行』の債権を発行した。平均相場、96.80。現在の相場、667。公衆の損失、2億6,900万」<sup>29)</sup>。

第4に、金融上の「力」が、貿易独占か植民地独占によって補完され、強大な金融支配力をつくりあげているのはイギリスである。イギリスは貿易と貿易金融を独占し、スターリング建てを全世界に普及させ、外国資金を呼び寄せ、そのことによって安定した金本位制を確実なものにしている。

レーニンは、イギリスの威力の理由を明らかにした好論文と評価して、ラン

---

29) レーニン『ノート』PP. 186—187。

スブルグの研究を次のようにメモしている。「イギリスの貿易と金融とが、他のすべての国の貿易よりも絶対的に優越していること。それはドイツ貿易を約50%ほどこえている。そのうえになお、植民地貿易がある!! 世界貿易の4分の3はイギリスのものである。＜すなわち、すべての国際支払の4分の3は、直接・間接に、イギリスを通じておこなわれる。スターリング建てはいまでも日本で、さらに中国、チリ、ペルー、南ベルシャ、トルコの大部分で優勢である——貿易界にひろく普及した英語の知識。そのうえイギリスは、全世界のこの貿易に融資している（もっともやすい%、もっとも安定した金本位、1ポンド＝金7 $\frac{1}{2}$ グラム等々）」<sup>30)</sup>。

さらにレーニンが、ヤッフエの「イギリスの銀行業」からも詳しい抜き書きをつくっている。少々長くなるが、引用してみよう。

「実際、金本位制に移行し、ほとんど一般にみられるように、金代替物として、巨額のイギリス為替手形を持っている国はいずれも、その世界的支払取引の大部分を、ロンドンの手形交換所に従属させているだけでなく、それによって、イギリスの金融的世界支配権の強化に直接的にも寄与しているのである。イギリスの為替手形をたえず巨額に持つということは、いうまでもなく、実際には、その国が少なからぬ資金をロンドンに用立てることを意味するにほかならず、ロンドンはロンドンで、諸外国の外国貿易につづけて融資し、それによって、スターリング貨と自分自身の手形交換機能とを確立するために、この資金を利用することができるし、また現に利用しているのである。こうしてポンド・スターリング貨の優秀性は、イギリスが自分の巨額の資本のほかに、さらに数10億マルクの外国資金を、自分の信用経済に役立たせることがたえずできる、という結果を生んでいる。……イギリスのはたしている役割から同国を排除するためには、『莫大な資金と低い利子』が必要である。……また巨額の資金を供給することができなければならないだけでなく、イギリスの通貨に代えよ

---

30) レーニン『ノート』P.49。アルフレッド、ランスブルグ『イギリスの銀行業の20年』からの抜き書き。

うとする通貨の無条件的な価値維持をも保障することができなければならない。すなわち、いつでも金による支払をおこなう用意がなければならない。……だから、ナショナル・シティ・バンク（モルガン銀行）、あるいは二、三のスイス銀行の計画は『空想』であろう<sup>31)</sup>。

国際的銀行業者のもつ金融支配力がきわめて巨大なものであること、それは人類が長い間に作りあげた「生産の社会化」という経済的発展の産物であり、高度に組織された金融の社会化、国際化の体系から生み出されるものであることが明らかになった。この組織的な金融支配の網の目の頂点にたった国際的銀行業者が様々な金融的支配と従属の手法と方法を編み出すことは容易に想像しうる。一口に金融的従属といっても、その形態は様々である。金融的従属の形態、および金融的従属の指標となるものをレーニンから探してみよう。

第1は、国際的銀行業者の国の資本や信用への依存の網の目に支配され、その国の政治的、経済的、金融的な「勢力範囲」のもとに置かれる場合である。

これまでの検討で、先進諸国による有価証券発行業務や貿易金融業務の独占が金融支配の強力なテコとなることが明らかになったが、この金融業務に依存して、細かな運河の網の目のごとく世界のすみずみにまで資本や信用が輸出され、その輸出先の地域に対し政治的、経済的、金融的な影響力が行使される。

レーニンはこの金融的な支配と従属の世界体系が諸国家間の支配と従属の諸関係の根底を基礎づけていると考え、いろいろな統計資料を使ってできる限り正確に海外投資量とその分布の計測を試みている。彼は国外投下資本の大陸別分布図を作成し、その分布の状況から、イギリスは、巨額の資本輸出がその巨大な植民地領土にむけられていることから「植民地的帝国主義」、フランスは、ヨーロッパ、とくにロシアに投資され、それも国債に投下されていることから、「高利貸の帝国主義」、ドイツは、植民地が大きくなり、ヨーロッパとアメリカに均等に分布していることから「第3の変種」と特徴づけている<sup>32)</sup>。

---

31) レーニン『ノート』P. 50。

32) レーニン『帝国主義』P. 83。

植民地領土にその多くを投資しているといえども、イギリスの金融的支配の範囲は世界のすみずみまでわたっている。それを羨んで、ドイツ人のシュルツェゲーヴァニッツは次のように書いている。「イギリスは、政治的貸し手として、自国の整理公債の相場への重圧をおそれることなく、イギリスの世界的帝国をあらたに結びつけた。母国内で植民地国債に認められた被後見人的な保障は、ナタールのように半ば開かれた未開地が、鉄道と国有地という大財産をもち、早くから地歩をかためて、きわめて安定しているプロシアよりも、やすい信用を手にいれるのをたすけた。この信用上の結合は、チェンバレンの特恵関税がかってそうであったのであろうが、それよりもおそらく強い＜利害の紐帯＞である。債権団イギリスは、帝国内の相互依存をこえて、日本を政治的従者の、アルゼンティンを植民地的隷属の、ポルトガルを隠蔽された債務奴隷の地位ににおいている。ポルトガル領アフリカの金モールをつけた総督は、イギリスのあやつり人形である」<sup>33)</sup>。

イギリスが植民地以外のどのような国に投資しているかについては、レーニンが最も信頼にたる統計資料と評価したペイシュの計算を見れば明らかである〔第4表〕<sup>34)</sup>。

海外投資の分布についてレーニンは大陸別に総計した数値しか『帝国主義論』では挙げていない。この計算のもとになった統計をみれば、金融的支配と従属の網の目が至るところに広がっていること、政府公債のように直接に政治的影響力に関係する有価証券に多くが投資されていることがあらためて確認できる。フランスとドイツについても、その海外投資先の詳しい分布をみておこう〔第5表、第6表〕<sup>35)</sup>。

---

33) レーニン『ノート』P. 40。

34) レーニンがペイシュを評価するのは、彼の計算が借換えを除外し、有価証券の額面価格ではなく発行価格をとり、重複計算を避けるために有価証券からの収益をあげているからである。レーニン『ノート』P. 357。ペイシュ『インド、植民地および外国の公債と会社に投下されたイギリスの資本』「王立統計協会雑誌」1911年、からの抜き書き。

第4表 インド、植民地および外国の公債と会社に投下されたイギリスの資本(1907—8)  
——ペイシュの統計数値をレーニンがA, B, Cのグループに総括したもの

A) 公債(政府と地方自治体の)

B) 鉄 道

C) 銀行, 炭坑, 石油その他

1910年における植民地(千ポンド)

	ロシア	トルコ	エジプト	スペイン	イタリア	ポルトガル	フランス	ドイツ	その他のヨーロッパ諸国	Σ	エジプトを除く
A)	19,109	9,650	14,044	1,885	4,164	1,336	—	1,351	22,870	74,409	60,365
B)	2,013	6,146	1,916	5,473	3,284	4,432	—	—	495	23,759	21,843
C)			27,793				7,071			90,199	62,406
Σ	38,388	18,320	43,753	18,808	11,513	8,134	7,071	6,061	36,319	188,367	144,614

(\*) 注=ペイシュでは総計は1554152、というのはカナダは、総括表では(186ページ) 372541となっているから、ところが、これのもととされた表(180ページ)によると、それは373541である。

	合衆国	キューバ	フィリピン	日本	中国	諸外国
A)	7,896	2,282	—	42,784	22,477	818
B)	586,227	17,387	7,902	8,910	—	4,521
C)	93,955	3,031	300			
Σ	688,078	22,700	8,202	53,705	26,809	61,907

	アルゼンティン	メキシコ	ブラジル	チリ	ウルグアイ	ペルー	アメリカ諸国
A)	38,339	8,276	40,221	17,071	9,860	81	3,838
B)	186,126	54,306	29,961	12,646	21,194	6,476	11,681
C)							
Σ	269,808	87,335	94,440	46,375	35,255	31,987	22,517

	カナダ および ニュー ファンド ランド	オース トラリ ア連邦	ニュー ジーラ ンド	オース トラレ シア 全体	アフリカ		インド および セイロ ン	海峡植 民地お よびマ レー諸 国	イギリ スのさ まざま な領土	Σ (私に よる)
					南	西				
A)	92,948	198,365	64,721	263,086	115,080	8,541	182,517	7,943	6,969	677,084
B)	223,740	2,951	761	3,712	9,354	—	136,519	—	1,717	375,042
C)										503,026
Σ	373,541 <sup>(*)</sup>	301,521	73,529	380,050	351,368	29,498	365,399	22,037	33,259	1,555,152 <sup>(*)</sup>

第2の形態は、先進諸外国の巨大銀行の在外支店や営業所、あるいは植民地銀行の支店や営業所などの国際的に張りめぐらされた金融のこまかな網の目に支配されることである。

この従属形態は、外国の銀行がその国の金融の営業分野に侵入して金融利潤を奪い取る結果を招くばかりでなく、直接に重要産業にまで支配力を行使する強力な手段にもなる。

帝国主義擁護の立場でこの問題を深く追及したヤイデルスの著作から、レーニンは多くの重要マークをつけて文章を抜き出している。

それは、ヤイデルスが外国との銀行業務そして外国での銀行業務を、国際的支払取引、外国債の引受け、および外国における産業的企業への参加の3段階に分け、このいずれもがドイツ大銀行の対外政策の特殊な各時期を特徴づけて

- 35) レーニンは金融的従属と貿易の関係について検討するのに、ドイツに金融的に従属している国とドイツから金融的に独立している国について、統計表を引用している(『帝国主義論』第21表)。このレーニンの表には、ドイツから金融的に独立している国として、イギリス、フランス、ベルギー、スイス、オランダ領インドとともに、オーストラリアがふくまれている。しかし、『帝国主義論ノート』のまったく同じ表(『ノート』P.156)をみると、オーストラリアとなっている。オーストラリアかオーストラリアか、はランブルグの原文をみないと明らかにならないが、第6表をみるとオーストラリアにはきわめて巨額の資本が投下されていることがわかる。このことから、レーニンがオーストラリアをオーストリアと間違えてドイツから金融的に独立した国に入れてしまったのではないかと推察できる。

第5表 フランスの対外投資額（1910年ごろ）

（十億フラン）

ロシア	10.0
イギリス	0.5
ベルギーおよびオランダ	0.5
ドイツ	0.5
トルコ、セルビアおよびブルガリア	0.5
ルーマニアおよびギリシア	4.0
オーストリア＝ハンガリー	2.0
イタリア	1.5
スイス	0.5
スペインおよびポルトガル	3.5
カナダおよびアメリカ合衆国	1.0
エジプトおよびスエズ	4.0
アルゼンティン、ブラジルおよびメキシコ	3.0
中国および日本	1.0
チュニスおよびフランス植民地	3.0
	$\Sigma = 35.5^{1)}$

レーニン『ノート』P. 257。

いることを立証した文章である。ヤイデルスは対外業務に特殊な注意をはらっているデイスコント・ゲゼルシャフトの一経営者の取引所調査委員会での発言を引用している。「私は……ドイツにおける外債の売却が、もしドイツ資本とドイツ銀行の手中にではなく、外国の手中におかれているとしたら、それを極度に大きな不利益と考えるだろう。世人がそういうことを避けようとしていたからこそ、われわれは外国に営業所、銀行支店およびコネクションをもつべきだ、ということに外務省が非常に関心をもつようになったのであり、また私の意見によれば、それは当然である。実際また、こういうコネクションがつけられてはじめて、ドイツの工業が外国で望みどおりの仕事をみつけることができるようになるのである」<sup>36)</sup>。

36) レーニン『ノート』P. 134。

第6表 ドイツの在外貨幣資本（有価証券での）（1897—1906年）

（百万マルク）

アルゼンティン	92.1
ベルギー	2.4
ボスニア	85.0
ブラジル	77.6
ブルガリア	114.3
チリ	75.8
デンマーク	595.4
中国	356.6
フィンランド	46.1
イギリス	7.6
イタリア	141.9
日本 本	1,290.4
カナダ	152.9
キューバ	147.0
ルクセンブルグ	32.0
メキシコ	1,039.0
オランダ	81.9
ノルウェー	60.3
オーストリア	4,021.6
ポルトガル	700.7
ルーマニア	948.9
ロシア	3,453.9
セルビア	152.0
スウェーデン	355.3
スイス	437.6
スペイン	11.2
トルコ	978.1
ハンガリー	1,506.3
アメリカ合衆国	4,945.8
（私の総計）	$\Sigma = 21,909.7$

レーニン『ノート』P. 257—258。

さらにヤイデルスはドイツの大銀行が直接外国の産業企業に携わる2つの段階と形態を明らかにしている。

第1段階は、70年代および80年代であり、外債、外国鉄道建設の最盛期であって、銀行は外国証券への有利な投資に注意を寄せるが、工業を考慮に入れるのがきわめて間接的である時期である。

1890年以後の第2の段階とは次のような状況である。「外国公債の銀行活動にたいする意義は減退し、一方外国工業にたいする大銀行の関心は増大する——当該国との以前の金融的な結びつきにはあまり依存しないようになって、大銀行により、あるいはその援助をうけて他の諸国で工業会社を設立することがますます頻繁となるが、しかも、それと同時に、対外取引では大銀行と国内工業との密接な提携が人の注意をひくようになる。……これら（国内諸企業）が外国へ進出するにあたっては、国内工場におけるよりもはるかに強く銀行をたよりにしているとしても、……そのかわり（国内とはちがって）外国では銀行が、すでに根をおろし、支店をもち、国際的支払取引を支配し、おそらくその国の政府と公債引受けを通じて結びついているのである」<sup>37)</sup>。

第3の金融的従属の形態は、ある国の銀行をはじめとする金融機関の経営が、外国巨大銀行の資本参加、「参与」という株式所有によって直接に支配される場合である。

この適例をレーニンはロシアの大銀行に見出している。彼は、E. アガードの著作から、外国の巨大銀行の参与と支配のもとで活動している銀行をグループ別に分けた資料を引用して紹介している〔第7表〕<sup>38)</sup>。それによると、ドイツの経営参与を受けている銀行は4銀行、シベリア商業銀行、ロシア銀行、国際銀行、割引銀行であり、イギリスの経営参与を受けているのは2銀行、商工銀行、ロシア＝イギリス銀行であって、最後にフランスの経営参与を受けているのは5銀行、ロシア＝アジア銀行、サンクトーペルブルグ私営銀行、アゾフ＝ドン銀行、モスクワ合同銀行、ロシア＝フランス商業銀行である。

---

37) レーニン『ノート』P.135。

38) レーニン『帝国主義』P.68。

第7表 銀行の資産(1913年10—11月の決算報告による)

(単位 100万ルーブリ)

ロシアの銀行のグループ別	投 下 資 本		
	生産的	投機的	合 計
(aの1) 4銀行〔ドイツの参与〕 シベリア商業銀行 ロシア銀行 国際銀行 割引銀行	413.7	859.1	1,272.8
(aの2) 2銀行〔イギリスの参与〕 商工銀行 ロシア=イギリス銀行	239.3	169.1	408.4
(aの3) 5銀行〔フランスの参与〕 ロシア=アジア銀行 サンクト=ペテルブルク私営銀行 アゾフ=ドン銀行 モスクワ合同銀行 ロシア=フランス商業銀行	711.8	661.2	1,373.0
(11銀行) 合 計 (a) =	1,364.8	1,689.4	3,054.2
(b) 8銀行 モスクワ商人銀行 ヴォルガ=カマ銀行 ユンカー会社 サンクト=ペテルブルク商業銀行 (旧ヴァーヴェルベルグ銀行) モスクワ銀行 (旧リャブシンスキー銀行) モスクワ割引銀行 モスクワ商業銀行 モスクワ私営銀行	50.42	391.1	895.3
(19銀行) 総 計	1,869.0	2,080.5	3,949.5

レーニン「帝国主義論」P.68の表より。

このような形態の金融的従属の影響は重大である。資本主義の一定発展した国では金融の集中が進み、きわめて少数の大銀行が多数の小規模な銀行や金融機関を傘下に携えて、きわめて小額の資本金でもその国の金融業務を独占でき

る状況にある。外国の巨大銀行がその資本力にものを言わせて、既存の大銀行の支配権を獲得すれば、その国の金融業務のほぼすべてを把握することも可能になるからである

この金融的従属の形態が、支配された国の金融全般に大きな影響を与える実例もロシアに見出される。

第1は、外国の巨大銀行が資本参与による金融利権を生かして、この資本参与そのものから投機的利潤の絞り取りを仕組み、この結果、被支配銀行の経営がその直接的な影響のもとに経営の健全性をそこなう事例である。アガードは、外国の巨大銀行が資本参与を投機的信用操作の機会に利用し、このため支配された銀行の営業そのものが投機色を強めたり、あるいは外国巨大銀行の直接の指揮のもとに経営の思わしくないロシアの銀行の合同が組織され、それが外国の巨大銀行の投機的利得を保障していることを激しく非難する。レーニンは重要マークをつけてそれを次のように引用している。「ドイチェ・バンクは、外国銀行の新株を1年間金庫のなかにしまっておき、それからこれを50%の中間利得でベルリン取引所に上場する。公衆は100に対して193を支払う。……ところがドイチェ・バンクは、株式を195%で、のちにはもっと高値で、ベルリンの公衆に与えたから（現在、配当は15%、相場は230——したがって利回りは6½%）、ペテルブルグにおける銀行指導部は、なによりも、配当を永続的に同じ水準に維持しなければならない。外国銀行はこれを無条件に要求する。それは総じて外国銀行がだす唯一の要求である。——それをどうやって維持するかは、外国銀行にはどうでもよいことなので、その結果は激しい取引所投機と、あやしげな設立作欺であって、ペテルブルグ諸銀行は〈参加方式〉のもとで直接にそれに追いついたものであった」<sup>39)</sup>。先のレーニンの引用したアガードの表〔第7表〕でも、営業が投機的内容を強めていることが確認される。

アガード自身が関係し、株主総会で抗議意見を提出した「ロシア＝中国銀行と北方銀行の合同（ロシア＝アジア銀行）」事件について、レーニンはアガー

---

39) レーニン『ノート』P. 91。

ドから次のように書き抜いている。「この〈合同〉をおこなったのは、ロシア＝中国銀行に〈関与〉し、その営業状況が不良なのを知っていて、〈窮境を脱し〉ようとしたフランスの銀行（バンク・ド・パリ・エ・デ・ペーパーナソシエテ・ジェネラル）で、……〈合同のさい、株式資本は33%だけ減資され、この額は積立金勘定に記帳された。こうしてそれは、あたかも積立金が順調な業務遂行から生みだされたような外観を銀行にあたえており、それと同時に、すべての利益金（!）を減資した資本にたいしていっそう高い百分比で将来分配する可能性を、新しい取締役会にあたえている。なぜなら、積立金は一挙に法定最高額に達したが、この最高額には利子をつける必要がなかったからである。この駆引きにたいしてすら、もとより株主たちにはどうすることもできなかった。総会がペテルブルグで開催されていたとき、彼らはフランスにすわったままでいたからである」<sup>40)</sup>。

第2の実例は、ロシアの金融行政も外国の巨大銀行への従属のもとにおかれる事態である。

これには、外国の資本参与や信用操作による投機的営業で経営危機を深めた銀行を、ロシア信用局が救済することによる金融行政の従属がある。例えば、先の「ロシア＝アジア銀行の合同事件」にはロシアの大蔵大臣や信用局の役人がかかわっており、彼らは外国巨大銀行の命令のもとにロシアの株主の負担で実際の資本金をごまかしたのである。この現実の資金がきわめて少いことは、結局、信用局が負担するところになる。

アガードはこの金融行政の従属の実態を次のように書いている。レーニンはこれについて絶賛の声をしるしている。「ロシアの大蔵大臣は銀行の取締役を（しばしば官吏のなかから）任命する——〈信用局〉を通じて数百万が補助金として諸銀行に交付される、うんぬん。

〈このことは、外見では〈ロシア的〉で、経営資金では〈外国的〉で、業務執行では〈ディレッタント的〉で、危険負担では〈政府的〉な、ロシアの実業

---

40) レーニン『ノート』P. 97。

界の寄生虫になったペテルブルグ諸銀行の活動を説明するものである。——そしてこの先例>（シベリア銀行などにかんすることが述べてある）<はいまやペテルブルグ諸銀行の機構の原則となった。ベルリンおよびパリの大銀行取締役は、つぎのことによって身を守られていると信じている。すなわち、

1) ペテルブルグ諸銀行のための信用局の直接の補助金、

2) ロシアの大蔵省の貸付（うち約60%はパリに、40%はベルリンに）を、担保とみなすことが、それである>……

<大蔵省はロシア=中国銀行>〔著者はこの銀行で働いていた!!〕<に、その使途は気にかけずに、同行に必要な現金を調達してやる目的で、国家保証の一連の有価証券の発行を委託した。たとえば、当局は同銀行にヨーロッパロシアの鉄道の社債の発行を委託した。これは政府によって保証され、しかもその売上げは、さしあたって同銀行の金庫に流れこんだ。銀道は4—5年のあいだに（それが建設されるあいだ）、もちろん、順次に資金を必要とするだけであるが、その間銀行は資金を自由に運用し、そのうえ発行でもうけた。この操作は毎年数回くりかえされたので、一般にひろがった」<sup>41)</sup>。

このような金融行政は結局のところ、ロシアの信用局がパリとかペテルブルグなどでの投機的な取引所操作のための資本を供給することになるのである。アガードは、信用局が「国際的な相場師を抑制」しないことに怒りを表明している。

また、この種の従属は、中央銀行の金融政策にまで及んでいる。レーニンは、ベルリンとパリの大陸大銀行の影響力が、「ロシア国家の金準備を高く」することにまで浸透している事実を払っている<sup>42)</sup>。

ロシアの金融的従属の形態にみられるように、経営参与による従属がどのような事態をひきおこすかが、明らかになった。しかし、この金融的従属はロシアだけに限らない。

41) レーニン『ノート』P. 95。

42) レーニン『ノート』P. 102。

例えばドイツの大銀行が、その植民地的支配領域が狭いにもかかわらず、世界各地の銀行に資本参加している実例をリーサーの作成した表からみてみよう。

第8表 ドイツ大銀行の在外銀行

地域(支店所在地による)	(支店数)	銀行所在地	銀行名	資本金 百万ペルク (その他)	どのベルリン大銀行が、この銀行を設立したか、またこれに参加しているか
中国、日本	(一)	アムステルダム	アムステルダム銀行	— 6フラン	— ダルムシュタット銀行
インド、その他	(12)	上海	ドイツ=アジア銀行	— 7.5 両	— ダルムシュタット銀行+ベルリーナー・ハンデルスゲゼルシャフト+ドイッチェ・バンク+ディスコント=ゲゼルシャフト+ドレスデン銀行+シャフハウゼン連合銀行
イタリア	(33)	ミラノ	バンカ・コンメルチー	— 105リラ	— ダルムシュタット銀行+ベルリーナー・ハンデルスゲゼルシャフト+ドイッチェ・バンク+ディスコント=ゲゼルシャフト+ドレスデン銀行
			アーレ・イタリア	—	
			ナ		
(?ベルギー)	(一)	ブリュッセル	バンク・アンテルナショナル・ド・ブリュッセル	— 25フラン	— ダルムシュタット銀行+ベルリーナー・ハンデルスゲゼルシャフト+ディスコント=ゲゼルシャフト+シャフハウゼン連合銀行
(?イギリス)	(一)	ロンドン	バンカーズ・トレディング・シンディケート	— 0.1 ポンド	— ダルムシュタット銀行
ルーマニア	(一)	ブカレスト	バンカ・マルモロツェシュ・フランク	— 10レウ	— ダルムシュタット銀行+ベルリーナー・ハンデルスゲゼルシャフト
(?アメリカ)	(一)	?	アメリカ銀行	— 25マルク	— ダルムシュタット銀行
(?イギリス)	(一)	ロンドン	ロンドン・アンド・ハンシディック・バンク	— 0.4 ポンド	— コンメルツ・バンク
(南アメリカ、その他)	(22)	ベルリン	ドイッチェ・ユーバーゼー=イッシェ・バンク	— 20マルク	— ドイッチェ・バンク
東アフリカ	(?)	ベルリン	アクツィエンゼルス・ユ=バーゼー=イッシェ・バンク	— 2マルク	— ドイッチェ・バンク
			シャフト・フェア・ユ=バーゼー=イッシェ・バウウンターネムンゲン		
中央アメリカ	(?)	ベルリン	中央アメリカ銀行	— 10マルク	— ドイッチェ・バンク
メキシコ	(?)	メキシコ	メキシコ商業銀行	— 16ペソ	— ドイッチェ・バンク

ボリネシア	(?)	ハンブルグ	ドイツ・ハンデ	2 $\frac{3}{4}$ マルク	ディスコント・ゲゼルシャフト ルス・ウント・プラン タージェン・ゲゼル シャフト・デル・ジュ ートゼー・イン・ゼルン
ニューギニア	(?)	(?)	— ニューギニア・コン	6マルク	ディスコント・ゲゼルシャフト ハニー
ブラジル	(5)	ハンブルグ	ブラジル=ドイツ銀	10マルク	ディスコント・ゲゼルシャフト 行
チリおよび中央 アメリカ	(9)	ハンブルグ	チリ=ドイツ銀行	10マルク	ディスコント・ゲゼルシャフト
ルーマニア	(2)	ブカレスト	バンカ・ゲネラール	10レウ	ディスコント・ゲゼルシャフト ・ロマーナ
ベルギー	(?)	アントワープ	コンパニー・コンメル	5フラン	ディスコント・ゲゼルシャフト シアール・ベルジュ
ドイツ領アフリカ	(15)	(?)	— ドイツ=アフリカ銀	1マルク	ディスコント・ゲゼルシャフト 行 ディスコント・ゲゼルシャフト
ブルガリア	(?)	ソフィア	バンク・ド・クレデ	3レフ	ディスコント・ゲゼルシャフト イ
ドイツ領西アフリカ	(4)	ベルリン	ドイツ=西アフリカ	1マルク	ドレスデン銀行 銀行
小アジア、トルコ サロニカ、その他	(12)	ベルリン	ドイツ・オリエ	16マルク	ドレスデン銀行+ナツィオナル ・バンク+シャフハウゼン連合銀 行
南アメリカ	(3)	ベルリン	ドイツ=南アメリカ	20マルク	ドレスデン銀行+シャフハウゼン 銀行 連合銀行

レーニン『ノート』PP. 323—325, リーサー『ドイツの大銀行とその集中』より。

第4の金融的従属の形態は、ある国の貨幣資本、あるいは貨幣収入や貯蓄の多くが外国の巨大銀行によって集積され、支配される事態である。

これには第1に、外国銀行の進出、あるいはある銀行が事実上の外国の支店になって、その国の貨幣資本の多くが握られる場合がある。レーニンは先のロシアの金融的従属の実態にふれて、「大銀行の『稼動』資本を構成する約40億ルーブリのうち、4分の3以上、すなわち30億ルーブリ以上は、外国銀行の、

それらによりもパリ（有名な3大銀行、すなわちバンク・ド・リュニオン・パリジャンヌ、バンク・ド・パリ・エ・デ・ペーパ、ソシエテ・ジェネラル）とベルリン（とくにドイッチェ・バンクとディスコント・ゲゼルシャフト）の銀行の、実質上の『子会社』である諸銀行の手にある」と書いている<sup>43)</sup>。第2は、巨大銀行が貯蓄をひきつける手段と技術、いろんな金融上の優位性をもっていて、全世界から貨幣資本を集中する場合である。

またしてもロシアの実例であるが、レーニンは特に重要なマークをつけてアガードを書き抜く。「ダヴィドフ氏（信用局）の言明によれば、国内の遊休経営資金総額50億ループリにたいして、預金16億4,800万ループリ・プラス補助金8億ループリ＝24億4,800万ループリに達しているという。したがって、ロシア帝国の遊休の経営資金の半分が、参加方式のもとに国際的な投機銀行に投資されていたことになる。この資金が回収される（そして企業にかえる）には、何年もかかるであろう」<sup>44)</sup>。

第5の金融的従属の形態は、これまでに述べてきた金融的従属が、政治的、外交的、軍事的な従属の様々な形態から生みだされたり、あるいは補完される場合である。イギリスが広大な植民地を保有しており、この政治的、軍事的な従属支配にまもられ、独占的・集中的にそして安心して資本を投下したり、利権を確保できる事態がその例である。つまり有利な投資と投機のための地域を確保するために、外国の政治や領土を支配諸国の影響のもとにおく場合である。レーニンは、シュルツェーゲーヴァニッツを引用して書いている。「国外投資のなかで首位を占めるのは、政治的に従属しているか同盟関係にある国々へ向けられる投資である。イギリスはエジプト、日本、中国、南アメリカに借款をあたえている。そしてその艦隊は、必要とあれば執達吏の役割を演じる。その政治的威力はイギリスを債務者の反逆から保護するのである」<sup>45)</sup>。

また、反対に金融的な従属がある国を先進諸国の政治的、外交的影響下につ

---

43) レーニン『帝国主義』P. 69。

44) レーニン『ノート』P. 99。

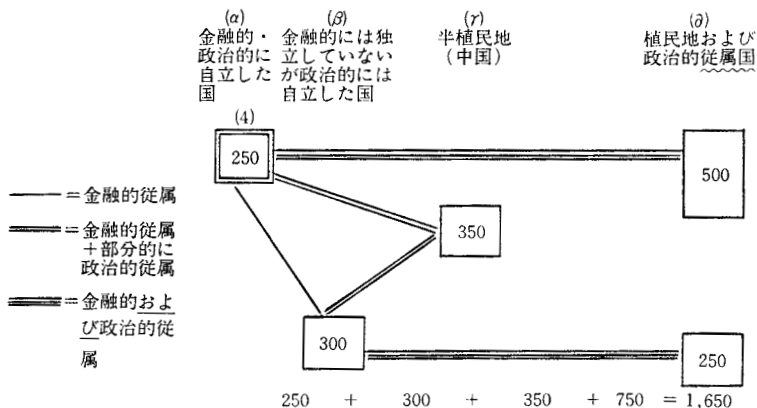
45) レーニン『帝国主義』P. 130。

なぎとめるという形態もある。

レーニンは書いている。「金融資本とそれに照応する国際政策——それは、世界の経済的および政治的分割のための列強の闘争に帰着するが——は国家的従属の一連の過渡的形態をつくりだすということを、注意しておかなければならない。この時代にとって典型的なのは、植民地領有国と植民地という二つの基本的国家群だけでなく、政治的に、形式的には独立国でありながら、実際には金融上および外交上の従属の網でがんじがらめにされている、種々さまざまな形態の従属国もそうである」<sup>46)</sup>。

レーニンはこのような諸国の例として、ペルシャや中国のような半植民地のほかに、スペイン、ポルトガル、ルーマニア、アルゼンティン、トルコ、オーストリア、ロシア、日本などの国を挙げている。（レーニンの作成した世界分割図を参照）

世界分割状況（民族的発展と関連させて）



(α) 4カ国、イギリス+ドイツ+フランス+アメリカ合衆国=252(百万)の人口

4カ国の植民地人口=473(百万)

(β) 東ヨーロッパの128(百万)(ロシア+オーストリア+トルコ)====従属国144(百万)

西ヨーロッパの + 小国家  $\frac{129}{257}$ (百万)====植民地の  $\frac{84}{228}$ (百万)

50 日本

307 + 中央および南アメリカ

(γ) 中国+半植民地

(δ) 植民地の557+144=701(百万)の従属国+中央および南アメリカの一部+半植民地の一部

46) レーニン『帝国主義』P.110。

ポルトガルについては、レーニンは、「政治的独立をたもちながら、金融的および外交的に従属していることのいくらか違った形態」<sup>47)</sup>をしめしている。その特徴を述べている。なぜなら、ポルトガルは、いわばイギリスの事実上の統治下におかれており、イギリスはヨーロッパや海外のポルトガル領をまもってあげるためにその海軍力や地上軍を配置してきたのである。

この政治的・軍事的保護の下にあって、「イギリスはそれとひきかえに通商上の特惠、すなわち、ポルトガルおよびその植民地への商品の輸出ととくに資本の輸出のための他国より有利な条件や、ポルトガルの港湾、島、海底電線を利用する可能性、その他等々を獲得した」<sup>48)</sup>のである。ポルトガルの従属形態は、政治的、軍事的従属関係が金融的従属関係を導いている場合、つまり前述したものの前者の関係にあたるものといえるであろう。

また、もう1つの形態の見本としてレーニンは、アルゼンティンの鉄道、銀行、公債に対するイギリスの投資量が多いことを理由にアルゼンティンをイギリスの政治・経済・外交に従属している金融的従属国と評価している。この従属形態は、前述した関係の後者にあたるであろう。

政治的、外交的、軍事的「勢力範囲」と金融的「勢力範囲」、これらの範囲はそれぞれの支配諸国の「力関係」に応じて異なる場合もあろうし、またこの両従属形態の補完関係もそれぞれの「力関係」に応じて異なったものが考えられるであろうが、金融的従属の実際の形態はそれぞれにいろんな条件下で政治的、外交的、軍事的従属と複雑にからみあった形態をとるといえるであろう。

レーニンの研究から考えられる金融的従属の5つの形態をとり出してみれば、以上ようになる。言うまでもないことだが、それぞれの形態はおたがいに関係し合い、ある形態が他の形態を強める場合もあれば、ある形態が他の弱さを補う場合もあろう。

このようにして、一握りの債権者国家による世界の支配体系が形成されているが、そこは静かな落着いたものではなく、有力な金融団体相互では「金融業

47) レーニン『帝国主義』P.111。

48) レーニン前掲箇所。

務をめぐる死にものぐるいの闘争」(金融独占競争)、および「世界の分割と国の支配のための金融業者グループとの激烈な闘争」<sup>49)</sup>が激しい動きをともなって演じられ、他方ではこの団体相互の一般的協定が複雑にからんでいる舞台である。

金融的従属が支配団体にどのような利益を、そしてどのような金融利権と金融独占利潤を作り出すものなのか、レーニンのいう「金融的略奪」とはどういうことなのか、これを次に考えてみよう。これまでの検討で、この問題はほぼ言い尽くされていると思われるが、最後にまとめて整理してみよう。

第1は、海外諸国と植民地の労働を搾取するものとしての金融的支配である。

帝国主義国の経済的特徴は海外からの利子と配当金からの所得、証券発行、手数料、投機からの所得のもつ意義が相対的に増大していることである。このことは、債権者国家に「寄生性」という政治的・経済的性格を付与する。

レーニンが、「資本主義的寄生性」の指標としてあげているのは、①資本輸出の絶対的な増大、②利子、配当などの海外所得が外国貿易の所得を上まわるほどになっていること、③この海外所得で生活する「金利生活者層」が、生産から完全に断絶して、特殊な階級を形成し、この金融貴族への個人的なサービスを生活の源泉としている階層が増大し、その政治的・階級的・文化的影響が労働者階級にまで及んでいること、等である。

第2の利益は、投機的操作や金融利権を利用して金融独占利潤を稼ぎ出す金融的支配である。

創業、外債や公債の仲介から生じる特別利潤が、銀行の「正常な金融業務」の低い利潤を補償するほどになっている。

第3は、商品の輸出を助長する手段である金融的支配である。

レーニンは「ひもつき借款」によって、借款そのものからの利益のほかに、「クルップの製品や鉄網シンジケートの鉄道材料など」の購入をおしつける方

---

49) レーニン『帝国主義』P. 141。

法を、「金融資本の詐欺的な術策」と批判する。そして、次のように書いている。「借款の一部を債権国の生産物、とくに軍需品、船舶、等々の購入に支出することを借款の条件とするのは、最も普通のことである。フランスは最近の20年間（1890—1910年）に非常にしばしばこの手段に訴えた。資本の輸出は商品の輸出を助長する手段となる。そのさい、とくに大きな企業のあいだの取引は——シルダーが『やんわりと』表現したように——『贈賄と紙ひとえ』である」<sup>50)</sup>。

第4は、自国に有利な産業を創出し、確保する手段としての金融的支配である。巨大銀行そのものが、国際的トラストやカルテルと結びつき、経済的分割に参加する場合である。

レーニンは、ヤイデルスを書き抜いている。「銀行の外国産業企業への参加には4形態が区別される。

1. 国内産業のための支店もしくは子会社の設立……。
2. 国内産業とゆるい関係をもつにすぎないか、あるいはまったくなんの関係ももたない個々の外国諸企業の……設立。……しかし、真に特徴的な事例は、比較的新しい外国鉄道の建設と、ドイツ・アジア銀行と共同して参加した大銀行の東アジア諸企業である。……これはすでに＜経済領域略奪の一環＞である。（バクダード、——中国等、諸植民地）
3. 第3のグループをつくっているのは、大銀行が自己の企業の設立により、しばしばまた既存の企業への参加によるだけで、外国のある産業で地位を確保しようという大銀行の試みである＜……南アフリカの鉱山会社への参加（ドイチェ・バンク、1894年以後、等々）＞
4. ……＜ドイツの銀行界も、自分自身ないしはその背後にあるドイツ資本に、外国でほとんど単独で搾取するための一産業を確保しようと試みた＞……たとえば＜ルーマニア石油産業を中心とする石油産業の一部をその支配のもとで組織しようとする＞努力……」<sup>51)</sup>

50) レーニン『帝国主義』P. 85。

51) レーニン『ノート』P. 136。

第5は、政治的・経済的利権や特権、各種の特殊な「便宜」を獲得するための金融的支配である。これらは、通商上の特権から、鉄道建設の利権、鉱山等の独占的特権までの広い範囲をふくんでいる。

レーニンは、この種の特権等を、資本輸出の生みだす「ある種の利益」と呼んで、次のように『バンク』から引用している。「国際資本市場ではさきごろから、アリストパネースの筆にふさわしいような喜劇が演じられている。スペインからバルカンにいたる、ロシアからアルゼンティン、ブラジル、中国にいたる数多くの外国国家が、借款を得ようという要求をもって、それもときにはきわめて緊急な要求をもって、公然あるいは隠然と大貨幣市場に現われている。ところが貨幣市場はいるとりわけ良好な状態にあるわけではなく、また政治的見通しも明るくはない。しかしどの貨幣市場も、隣国が自国を出しぬいて借款に応じ、それとともになんらかの反対給与を確保しはしないかという懸念から、借款要求をあえて拒否しかねている。この種の国際取引のさいにはほとんどいつも、通商条約における譲歩であれ、給炭所であれ、港湾建設であれ、うまい利権であれ、大砲の注文であれ、なにかが債権者の利益に帰するのである」<sup>52)</sup>。

### 第3章 金融的従属の帰結

帝国主義の時代では、金融的従属の形態は、金融資本の全般的支配形態のうち、最も重要な支配・従属の関係であることは、以上で明らかとなった。

帝国主義の時代の金融業務は金融独占という形態をとらざるをえない。しかし、この金融独占は永続的ではありえないのであって、それにかわる住民のための金融業務の構想を生み出さざるをえないのである。この構想の手がかりをレーニンに求めてみれば、次のようにいえるであろう。

第1には、金融的従属の全般的関係が深まれば深まるほど、それは金融の公共的、共同的、社会的性格を強めるということである。

---

52) レーニン『帝国主義』P. 84。

金融独占が多く、住民から貨幣資本を集中すればするほど、金融事業とは社会の全構成員の資金拠出機関としての性格を強めるからである。さらに、この集中した資金の管理・分配が個別の分散的な機関ではなく、社会全体に強大な組織力をもつ金融独占によって行われるとすれば、それは社会構成員全体の労働と生活に一般的な関係をもつものとなり、住民の意志を反映した民主的な資金の管理・分配が不可欠なものとなるからである。

巨大な規模にまで発展した金融業務は住民の生活と生産を発展させるための国民的な共同事業として発展させられるべきである。

レーニンは、マルクスを引用して、この問題について次のように書いている。「さきにあげた銀行資本の増加、巨大銀行の支店と出張所の数の増大、それらの口座の増大その他にかんする資料は、全資本家階級のこの『一般的簿記』を具体的にわれわれにしめしている。いや資本家のだけでない。なぜなら銀行は、一時的とはいえ、小経営主や務め人やごく小数の上層労働者などのありとあらゆる貨幣所得をかきあつめるからである。『生産手段の一般的配分』——これこそ、形式的側面からすれば、幾十億という金を自由に行っている現代の銀行——このなかには三つないし六つのフランスの巨大銀行や、七つか八つのドイツの巨大銀行がある——から成長しつつあるものである」<sup>53)</sup>。

また、一国の住民の意志を反映した金融事業や金融行政とは、当然にそれらが外国の巨大銀行の営利政策によって踏みにじられないこと、およびこの国の巨大銀行も外国の金融事業の主権を侵害することのないこと、つまり金融主権の相互尊重という問題を不可欠なものとしてふくんでいる。

第2に、金融的従属形態が深まれば深まるほど、金融関係労働者が金融の公共性、共同性、社会性の担い手として登場するようになるということである。

レーニンはシュルツェーゲル・ヴァニッツを引用して次のように書いている。「『30年まえには、自由に競争する企業家たちは、「労働者」の肉体労働の範囲に属さない経済活動の10分の9を遂行していた。いまでは、雇い人がこの経

---

53) レーニン『帝国主義』P. 49。

済的精神労働の10分の9を遂行している。銀行業はこの発展で先頭を切っている』。シュルツェーゲーヴァニッツのこの告白はまたしても、最新の資本主義、帝国主義段階の資本主義が、なにへの過渡であるかという問題に通じる」<sup>54)</sup>。

金融労働の精神的性格が強まるというのは二重の意味でそうである。社会内分業という見方からすれば、金融労働は銀行資本の増大にともなってますます多くの住民の資金の管理、記帳性を強め、「一般的簿記」としての労働的性格を強めてゆくことである。工場内分業という見方からすれば、金融の公共的性格を支える金融労働としての性格が高まり、金融の現実の管理、記帳業務がより多くの労働者によって担われてゆくのに対して、この事業の単なる決定権（それは利権と腐敗の温床になる）だけがますます少数の人々に集中してゆくことである。

住民のための金融業務を担う金融労働の増大——これが金融的従属論の最後の結論である。

---

54) レーニン『帝国主義』P. 52。